

# 10 関学らしい 多文化共生とは

—日本語教育の可能性—

**日時** 2022年9月2日(金) 10:00~13:00

**場所** 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス G号館 101号教室

**主催** 関西学院大学 日本語教育センター

## プログラム

総合司会 山本 真理 日本語教育センター・准教授

- ・10:00 開会あいさつ 新関 芳生 文学部・教授／国際教育・協力センター長
- ・10:05 報告1：日本語教育センター10年の歩み～拡大する大学の国際化施策の中で～  
【報告者】  
森本 郁代 法学部・教授／日本語教育センター副長
- ・10:20 報告2：日本語教育センターの現在の姿～教育実践と学生の声～  
【報告者】  
山本 真理 日本語教育センター・准教授  
浅津 嘉之 日本語教育センター・言語特別講師  
長谷川 哲子 経済学部・准教授／日本語教育センター兼任  
藤原 由紀子 日本語教育センター・言語特別講師  
日本語教育センター事務局・日本語学習科目の履修者および協力学生
- ・11:30 パネルディスカッション：関学らしい多文化共生キャンパスとは  
【パネリスト】  
武田 丈 人間福祉学部・教授  
岩坂 二規 教育学部・准教授  
志甫 啓 国際学部・教授  
【ファシリテーター】  
牲川 波都季 総合政策学部・准教授／日本語教育センター兼任
- ・13:00 閉会あいさつ 阿部 潔 社会学部・教授／日本語教育センター長

## 開催にあたって

### メッセージ

関西学院大学 学長 村田 治



関西学院大学は、「国際性豊かな学術交流の母港『グローバル・アカデミック・ポート』の構築」という構想を掲げ、2014年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援(SGU)事業」に採択されました。採択後、さまざまなプログラムを開発し、学生が多様な学びの機会を得る環境を整えてきました。その大きな柱である国際交流事業において、本学学生の海外協定校への留学派遣と、海外協定校からの留学生受入は、両輪としてSGU事業を推進しています。

本学の日本語教育センターは、2011年に開設されました。開設以降、教育・研究の両面から精力的に活動を行い、交換学生、また本学での学位取得を目指す留学生に対して質の高い日本語教育を提供しています。また、留学生と共に学べるプログラムを積極的に開発し、キャンパスの国際化に大きく貢献してきました。

今後も、本学における多文化共生の実現と展開に向けて、日本語教育センターが果たす役割はこれからもますます大きくなることと思います。さまざまな文化的背景を持つ学生同士がキャンパスで出会い、共に学ぶ経験を通して、お互いの文化に対する理解を深め、“Mastery for Service”を体現する世界市民に育つことを願っております。

関西学院大学 副学長・国際連携機構長 丸楠 恭一

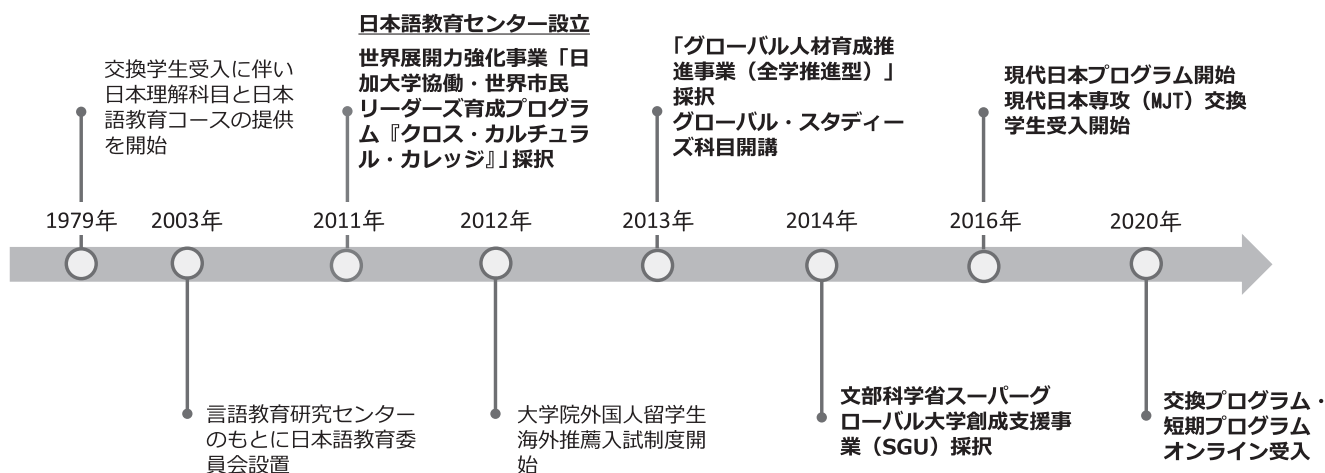
関西学院大学日本語教育センターは、関西学院の国際化の要諦を成す「多文化が共生する国際性豊かなキャンパスを実現する」という理念の下、全学的見地から日本語教育を統合的に運営し発展させることを目的とし、2011年4月に設立されました。

本日、日本語教育センター設立10周年シンポジウムを開催するにあたり、改めてこの10余年を振り返りますと、同センターが実施してきた教育・研究活動の発展には実に目覚ましいものがあつたと言えましょう。とりわけ、文部科学省スーパーグローバル大学創成支援(SGU)事業採択後は、留学生受け入れ数の量的拡大や質的多様化に対応して多彩な科目を提供し、関西学院らしい多文化共生のあり方の実現に、日本語教育の立場から多大の貢献を成してまいりました。

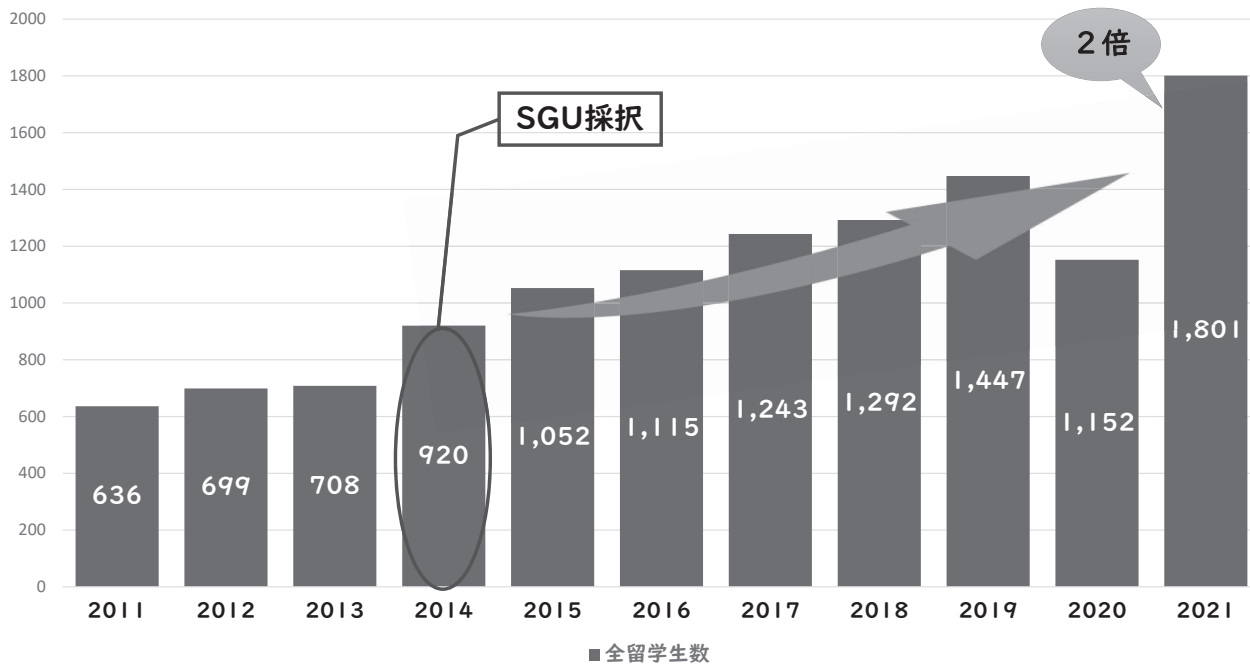
関西学院において、日本語教育センターの次の10年の役割がさらに高まっていくことは疑いありません。閉塞の度を増す現代日本にあって、創造性の源泉の一つである多様性を本学にもたらすことに寄与する日本語教育は、「新しい知を生み出す場としての関西学院大学」の根幹にかかわる意義を持つものだからです。

本日のシンポジウムの開催とその成果が、関西学院の教育・研究全体における日本語教育センターの今後のさらなる貢献につながることを祈念し、メッセージに代えさせていただきます。

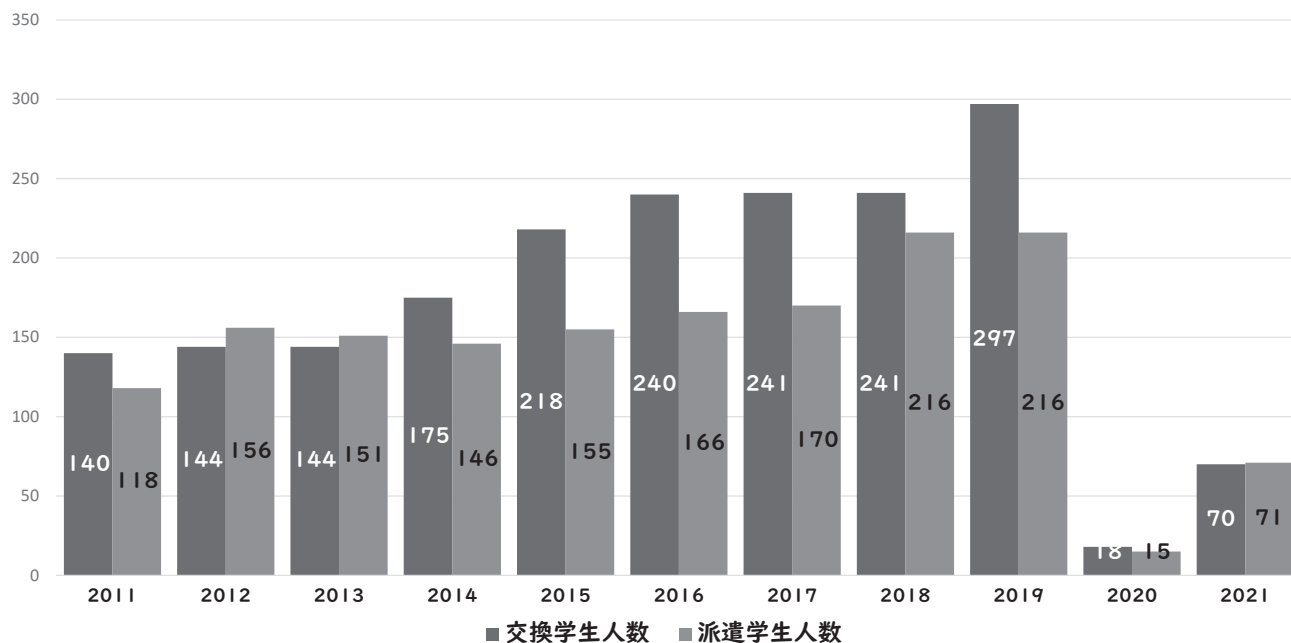
## 日本語教育センター設立10年のあゆみ



## 留学生数の推移：全留学生（正規留学生＋交換学生）



## 交換学生数と派遣学生数の推移



## 留学生の出身国・地域

### -大学院留学生を例に-

2011年度：18の国と地域から123名受入

中国 (74)  
 韓国 (12)  
 インドネシア (7)  
 タイ (6)  
 サウジアラビア (5)  
 台湾 (4)  
 アメリカ (2)  
 コートジボアール (2)  
 香港 (2)  
 モンゴル  
 ベトナム  
 ブルネイ  
 カナダ  
 アルゼンチン  
 ロシア  
 ブルガリア  
 UAE  
 アンゴラ

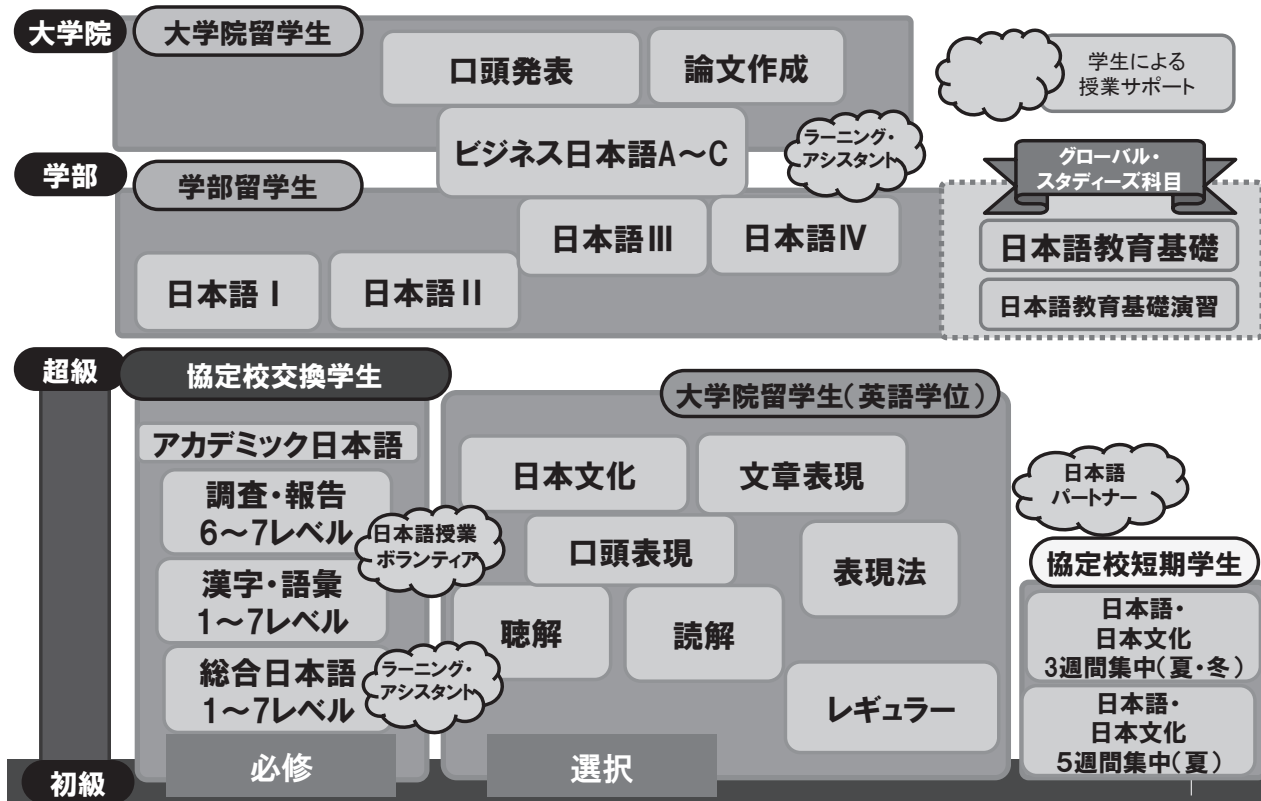
2021年度：29の国と地域から205名受入

中国 (146)  
 インドネシア (18)  
 ベトナム (7)  
 韓国 (3)  
 モーリタニア (3)  
 アメリカ (3)  
 タイ (2)  
 インド (2)  
 サウジアラビア (2)  
 ジンバブエ (2)  
 メキシコ (2)  
 ミャンマー  
 台湾  
 オマーン  
 シリア  
 アルジェリア  
 ナイジェリア  
 ガーナ  
 ザンビア  
 コートジボアール  
 モザンビーク  
 ニジェール  
 カナダ  
 コロンビア  
 オーストラリア  
 キリバス  
 ウガンダ  
 南アフリカ共和国  
 ソマリア

( ) 内は2名以上受入の人数

## 日本語教育センター提供科目の体系図

短期留学生から大学院生まで、多岐にわたる日本語教育プログラムを提供しています。多様な学生たちが、日本社会への認識や異文化理解を深めていけるような、教育プログラムの開発・実践を目指しています。



## 【学生の声】日本語学習科目への協力学生

関西学院大学の学生が、LA(ラーニング・アシスタント)・日本語授業ボランティア・日本語パートナーとして留学生の日本語学習科目を支えています。学生たちの「声」として、授業での交流を通して感じたこと、学んだことを紹介します。

### 学生データ

	協力学生数 (2021年度)
LA(ラーニング・アシスタント)	58名
日本語授業ボランティア	385名
日本語パートナー	46名

年間約500名の学生が学部の枠を超えて日本語学習科目に協力

### 正規留学生対象科目 交換学生対象科目 ラーニング・アシスタント(LA)の声

異なる他者との接し方を学んだ

異文化を知れた。私が参加させていただいたクラスは、留学生の皆さんと話し合う機会が多かった。その中で、例えば日本の雇用制度について議論した後に、それぞれの国の制度についても教えてもらうなどし、一度に世界中の文化や制度を学べたのが楽しかった。

LAをして良かったです。知識面だけでなく、留学生の学習意欲や好奇心、勤勉さなどモチベーションといった観点から刺激もらう事ができたからです。

活動を通して学んだことは、外国の方との日本語でのコミュニケーション方法です。

最初は、どのような日本語が通じるかわかっていなかったのですが、先生の言葉の選び方や、チャットに難しい単語を打っているのを見て、徐々にどうすれば良いかわかるようになりました。

相手のニーズを汲みとる重要性を学びました。日本語レベルによって、ゆっくり分かりやすく話すのか、それともいろんな語彙を用いて話すのかなど留学生のニーズやレベルに合わせた対応が必要だと思いました。

LAでサポートする立場でありながら、自分自身も色々と考え学ぶ機会となった。

## 交換学生対象科目

## 日本語授業ボランティアの声

多様な価値観  
に触れる機会

日本語の難しさ、  
面白さ、新鮮さ

開学にはさまざまな国から留学生が来ており、日本や日本語に興味を持ってくださっていることを知れたのは非常に嬉しかったです。また会話の際に自分自身が発する単語や文法をシンプルにし、留学生にとって理解しやすいように組み立てる作業を行うことで、いかに日常使っている日本語が複雑で長文かという日本語の性質を知る機会にもなり、母語理解に繋がったと感じています。他者の第二言語習得の過程に関わる貴重な経験と、異文化と他者の価値観に触れることのできるいい機会を与えてもらえました。

様々な国や地域の学生さんと話す機会を得られたことで、世界中の国や文化について学ぶことができました。特に、普段の講義ではあまり知ることができないような日常的な事柄について知ることができたことは、より世界を身近に感じられるきっかけにもなったと思います。

日本語の難しさ、日本語を進んで学ぼうとする人がいること、日本文化などを面白く思ってくれる人がいること(を学んだ)。

日本語の難しさを学びました。何気なく話している日本語ですが、日本語は主に日本でしか使われない言語であり、文字も漢字・ひらがな・カタカナと種類が多いです。助詞もたくさんあり、本当に難しい言語だと改めて学びました。

日本語授業ボランティアをして非常に良かったと思っています。なぜなら、本当の学習者はどのような感じで日本語を学習しているのか。また、教授する際に、どのようなことで教師か学習者が躓くのかを知ることができます。さらに、現役の日本語教師はどのように日本語を教えているのか、どのようなことを心掛けているのかを授業に協力する(参加する)ことで、色々学べるからです。(日本語教育学専攻の人にとって)

異なる視点で日本のことや日本語を見ることができた。日々の生活では気づかないようなことを知ることができた。

日常生活の様子を聞くことから色々な国の文化の違いを感じられた点(がよかった)。

相手に日本のことを教えるだけでなく、逆に日本について教えてもらうことがあったり、相手の国のことを知ることができて、とてもいい経験になった。

オンラインではあったものの言語だけでなく、文化や価値観を学ぶことができました。

日本語を新鮮に感じるすることができた。日本について改めて考えるきっかけになった。留学生の視点から見る日本の印象は面白かった。

日本語授業ボランティアをして良かったと思います。まず自分の世界が広がるからです。複数のクラスに参加させていただき、様々な国の留学生と会話をしました。現地の方から現地の実際の話聞くことができ、自分の世界が広がりました。またイメージして想像と実際は違う点もあったりして素直に色々知れることは楽しいと感じました。また、留学生に言葉の意味を質問されて、答えられないことがありました。何気なく使っていた言葉の意味を考えるきっかけを作ってもらえたことは良かったなと思います。

ボランティア以前は、何も考えずに話していた日本語一つ一つの意味などに関心を抱くようになった点。

## 短期留学生対象科目

## 日本語パートナーの声

多文化共生  
の難しさ

様々な意見や  
価値観の受容

留学生とともに授業に参加し、日本語学習をサポートする制度です。単なる日本語の練習相手にとどまらず、プロジェクト型授業のグループメンバーとして、様々な交流を行っています。

日本語パートナーの活動を通して、学んだことは、多文化共生は、ただの大きな括りで、一つ一つを解決するには、視点を細かく分ける必要があるということです。多文化と一言でいうのは簡単ですが、今回出会った留学生の数だけ文化があって、さらには、日本語パートナーの数だけ文化があることを知りました。それを世界規模で考えると途方もない数になります。多文化共生という曖昧な主題に対しては、ミクロな視点で、一つ一つそれぞれを尊重する気持ちを持つことが大事だと学びました。

私は文学部で、日本の文学と語学専門なので多文化共生について学ぶ機会がありません。そのため、この活動を通して、多文化共生とは何かを考えさせられました。多文化共生というと、異文化理解のイメージがあり、国境を越えるためにどうするかを理解することが大切だと思っていました。しかし、留学生と話していると、国籍だけでなく、高齢者や障害のある人のことも考えることが多文化共生だと気づきました。自分のことだけでなく、周りの人のことまで考えて行動することの重要性を学びました。

コミュニケーションのありかたについて考え直す重要な機会となりました。特に、趣旨や要点をより明確にした話し方や、相手が答えやすいような質問の仕方など、相手が「わかる」伝え方について学ぶことができました。

また、ディスカッションの仕方も非常に勉強になりました。テーマが「多文化共生」という抽象的かつ個人々々によって捉え方が非常に多様な概念であることから、順序だてて話を進めることや全員の意見をしっかりと聞くこと、テーマや目標に関する明確な認識を共有することがより重要となるプログラムだったと思います。これらはあらゆるディスカッションの場において非常に大切な事柄なので、そういった点でも大きな学びでした。

日本語パートナーとしてこの経験ができてよかった。留学生や他学部他学年の日本語パートナーと一緒に授業を受ける中で、普段の生活では考えない角度からの思考・学びができたと思う。色々な価値観や考えに触れられたのが一番よかったことだと思う。

同年代の海外の学生からたくさん刺激をもらえました。一緒に何か一つのことに取り組むことで、彼らの姿勢や日本語を一生懸命話そうとする姿勢に感化されることが多くありました。私自身、日本で英語の勉強をもっと頑張ろうと思うことができました。また、一つのテーマに沿って新しい視点からの意見を聞くことができ、日本にいながらとてもいい経験をさせてもらったなと思いました。

一緒に成果物を作ったのが、とても楽しく、いい思い出になったからです。私のいたグループでは、アニメーションを作りました。やることはたくさんあったけれど、アニメーション用の台本を考えたり、みんなで台本の読み合わせをしたりとても充実した時間を過ごすことができました。

いつも使う日本語で留学生と話したら、留学生にはうまく伝わりません。相手のことを考えながら、日本語を使って交流する。一つのを一緒に作り上げる協力をする。これがとても大切です。

また、日本人が黙っていたら留学生も話す気持ちになりません。いっぱい話をしよう積極的に話しかけてください。そして、相手の様子を見ながら、配慮しながら話題を広げてください。

そして、一番大切なことは何事も楽しく行うことです。楽しさ、笑顔は世界共通です。難しいことも楽しくやれば、自然と笑顔になります。

武田 文

発表タイトル

## ソーシャルワーク・社会起業教育における多文化共生の取り組み

要 旨

関学着任1年目に学生団体「上ヶ原ハビタット」のフィリピンでのワークキャンプの引率を引き受けたことをきっかけに、日本からさまざまな問題を抱えてフィリピンに帰国したフィリピン人女性たちを支援する「バティス女性センター」と関係ができ、それまで社会福祉学科の実習は国内に限られていたのを、フィリピンでの実習を開始。2008年に移籍した人間福祉学部社会起業学科では社会起業インターシップ(海外)という授業を立ち上げ、フィリピンに加え、中国、ネパール、ルワンダ、オーストラリアなどにも学生を送り出すようになった。今年度からは、人間福祉学部の3学科共通の人間福祉フィールドスタディ(海外)として展開している。

ゼミの活動としては、最初は国内在住の外国人支援の団体とともに地域の「多文化こどもまつり」の運営に関わる活動をしたこともあったが、フィリピンのバティス女性センターと関係確立後はバティスが生産するフェアトレード商品の開発支援や国内での販売活動にかかわる機会をゼミ生に提供。コロナで海外渡航が難しくなってからは、アジア各国の貧困女性を支援する神戸のアジア女性自立プロジェクトと連携して、フェアトレード商品の開発・販売や広報活動に参加している。

かつては欧米への留学が中心だった国際化・多文化共生の教育プログラムは、アジアやアフリカでの活動、また日本在住の外国人との多文化共生などに拡げていく必要性があらう。

関西学院大学人間福祉学部教授。米国テネシー大学研究科修了。Ph.D.(ソーシャルワーク)。関西学院大学社会学部専任講師および准教授を経て、現職。専門は、多文化・国際ソーシャルワーク。主著に「国際ソーシャルワークを知る」(中央法規,2022年。共編著)、「参加型アクションリサーチ(CBPR)の理論と実践」(世界思想社,2015年。単著)、「フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー」(関西学院大学出版会,2005年。編著)がある。



岩坂二規

発表タイトル

## “ちがいのちがいをこえて” — 多文化共生時代の教育課題とことばの学び

要 旨

教育学部では、2015年から多文化共生イベント「わ〜んど・にじいろ・まつり」を共催し、学生が中心となって企画運営に参加しています。急速に進む外国人材受入れ政策と新しい入管制度の中で、大学がこのような地域のイベントに関わる意義が増えています。一方で、イベントの根拠となる問題意識の認知や理解が不十分であることや、単発のイベントの限界性など、解決すべき課題もたくさんあります。

人権教育の参加型教材に「ちがいのちがいを」というカード遊びがあります。人に関わる様々なちがいを「あっていい」「あってはならない」「どちらともいえない」に分けながら、その理由をグループで話し合います。多文化共生は特定の世代や対象の問題ではないこと、一人ひとりのイメージや考え方にはちがいとその理由があること、さらには根底にある人権という普遍的な価値を誰もが共有していることに参加者は気づいていきます。「わ〜んど・にじいろ・まつり」のようなイベントも、日本語教育をはじめとする在留外国人支援の活動も、多様な人が関わりながら共通する課題や価値を共に見出す場であることが重要です。インクルーシブ・コミュニティの実現を目指す関西学院にとって、ルーツや自分らしさがリスペクトされ、互いに「ちがいを」と「おなじ」をいきいきと認め調和させるような学びを創りだしていきたいと願っています。

関西学院大学教育学部准教授。同ヒューマンサービス支援室副室長。同志社大学アメリカ研究科後期課程単位取得退学。修士(アメリカ研究)。聖和大学専任講師、准教授を経て現職。研究テーマは国際教育、グローバル・シティズンシップ教育。主著に、「道—「大島ワーク」の50年」(関学生協書籍部,2019年,編著)、「教師と人権教育—公正、多様性、グローバルな連帯のために」(明石書店,2018年,共訳)。



## 大学の国際化にみる日本語教育の意義

## 要 旨

近年の日本の大学の国際化は、日本人学生の海外送出しを重視する形で進められてきた。交換留学はその中でも人気の高い渡航形態である。本学は300に迫る海外協定校を有するが、協定校の多さだけでは本学学生の交換留学者数は必ずしも増加しない。授業料相殺の形をとる場合、送出し数と受入れ数のバランスが問われるため、送り出すためには受け入れなければならない。協定校の学生にとっても留学先は多数ある。なぜ日本なのか、なぜ東京以外なのか、なぜ関西学院大学なのか。本学が選ばれるまでには幾重ものハードルが存在する。

学年定員300人の国際学部はその1割を外国人留学生が占める。留学生の半数が英語話者学生として入学することや、日本人学生の英語力の向上等を念頭に置き、他部局との共同開講を含めて年間100以上の英語開講科目を提供してきた。それらの科目は交換留学生も履修するが、彼らに尋ねると、本学の手厚い日本語教育や日本人学生との交流機会を増やす仕掛けの存在が、彼らの所属大学において口コミで広がっていることが窺える。

昨年来、外国人留学生の日本での就職に関して幾つかの調査報告が公表された。「日本語」の運用能力が何より重要な要素であることは、過去10年、ほとんど変化していない。日本の大学における留学生への日本語教育は、単なる言語教育にとどまらず、生活支援・生活指導等を包含するものであることも強調しておきたい。

関西学院大学学長補佐／国際学部教授。専門は国際的な人の移動研究、労働経済。関西学院大学大学院修了、博士(経済学)。九州大学大学院経済学研究院講師・同留学生センター講師(兼任)、関西学院大学専任講師・准教授を経て現職。過去に(株)リクルートワークス研究所客員研究員、カールトン大学(カナダ)客員教授、ニューヨーク州立大学オールドウェストバリー校客員研究員等。主な論文に「外国人留学生の受入れとアルバイトに関する近年の傾向について」『日本労働研究雑誌』2015年10月号(No.662)など。



## ～結びにかえて～

## メッセージ

関西学院大学 日本語教育センター長 阿部 潔

日本語教育センターは2011年の開設以来、関西学院での国際交流事業において重要な役割を果たしてきました。その内実は、単に正規留学生・交換学生に対してきめ細やかな日本語教育を提供することに尽きるものではありません。多様な学生たちが日本語という言語の学修を通して日本社会への認識を深め、諸外国と日本との異文化理解を深めていけるような教育プログラムの実践をめざしてきました。それを通して学生たちが、自身の言語・文化的背景をアイデンティティとして見つめなおし、そのうえで日々の学修や生活に根ざした国際交流を果たせるようになることを考えたからです。

学部兼任の専任教員4名、学長室直属センター専任教員1名、言語特別講師3名、常勤講師3名という小さな組織ではありますが、この10年間、学内・学外のさまざまな組織とその関係者のご理解とご協力のもとで、日本語教育センターはユニークな教育・研究を通して、多文化共生キャンパスの構築に取り組んできました。その成果を今回の10周年記念シンポジウムの場でより多くの方々にご報告できることを、センター関係者一同とても光栄に感じています。

グローバル時代における大学での多文化共生への取り組みには、常なる挑戦と革新が求められます。これからも日本語教育センターは、関西学院「インクルーシブ・コミュニティ宣言」が掲げる理念に根ざした多文化共生を目指して、さまざまな活動に取り組んでいきます。このたびの記念シンポジウム開催が、この10年を振り返ると同時にこれからの10年に向けた「関学らしい多文化共生」をともに考えていく機会となることを、心より願っています。